様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３４５

研究課題名（和文）近代ロシア文学創成の環境―貴族屋敷（ウサーヂバ）の文化的・社会的ランドシャフト

研究課題名（英文）Environment of Birth of Russian Modern Literature--Cultural and Social Landscape of Russian Country Estate

研究代表者
坂内　徳明（BANNAI, Tokuaki）

一橋大学・　・名誉教授

研究者番号：００１２６３６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ロシア近代の社会と文化に関する諸問題を考察する上で欠かすことのできない貴族屋敷（ウサーヂバ）という文化現象を特に近代ロシア文学の成立をめぐる「環境」として捉え、ウサーヂバ文化の意義について明らかにすることにあった。本研究の最終年度にあたる平成27年度には、これまで三カ年の研究成果を全体で11本の論文ならびに翻訳、さらに文献目録としてまとめ、成果報告書（176ページ）として刊行することができた。本研究の成果により、ロシア・ウサーヂバの文化史的意義の大きさが明らかになり、加えて、この現象がさらなる学際的な研究対象となることが確認された。

研究成果の概要（英文）：The main object of this academic project is to examine the significance of the Russian country estate (usad'ba), which has been the indispensable target for Russian Studies and had played the role of the "founder" or "environment" of Russian modern literature. We have published the big Report of this project (176p.), which has concluded 11 articles, translations and bibliography.
Results of this project have indicated the importance of this cultural-historical phenomenon-usad'ba and have made it clear to study more and more from the viewpoint of interdisciplinary approach.

研究分野：ロシア文化史・民俗学

キーワード：ウサーヂバ文化　貴族屋敷　近代ロシア文学　ランドシャフト　貴族文化　個人蔵書　ダーチャ　アンドレイ・ボロトフ

１．研究開始当初の背景

（１）ロシアのウサーヂバ usad ’ba とは、一義的には、貴族特権階級の屋敷、主として都市近郊に作られた第二住居を意味するが、それのみにとどまるものではない。建物だけでなく、その敷地内で営まれる各種生業（農業、園芸、果実栽培、手工業等)、そこに住む貴族主人・家族だけでなく、多くの使用人、農民、農奴、さらには各種の訪問者を含む多くの人々の各種営為の総体も意味する。それは、いわば主人を頂点とした領地共同体のミクロコスモスであり、それは中世に生まれ、17 世紀半ばから具体化し、18 世紀に開始する近代化・「西欧化」の過程で大きく成長しながらそのまま 20 世紀まで存続したロシアの基層文化と考えることができる。1917 年のロシア革命によって、貴族の生活の中核たる場であるウサーヂバは、制度的・社会的に壊滅したが、それまでのロシアの社会と文化をトータルに考える上で決して欠かせぬ、しかもきわめてロシア的な特徴を備えた文化現象である。20 世紀初頭以降、社会の表層から完全に消滅したとはいえ、現代まで継承されてきたロシア人の自然観、対人関係、生活観、美的世界観等々を理解するうえで、ウサーヂバに投影・凝縮された時間と空間に関するロシア人の基本的スタンスは、おそらくはもっとも重要なファクターのひとつとして理解できる。

（２）本研究代表者は、これまでロシア民俗学・民衆文化史を主要な専門分野としてきたが、その研究過程にあって、18 世紀半ば以降に急速に形成されていくいわゆるロシア文化の諸現象の中で、特に貴族文化のダイナミズムとそれを醸成していった貴族屋敷という《場》に注目した。この貴族屋敷というゲシュタルトこそが 19 世紀半ば以降に「開花」したロシア芸術ならびに文化を生み出したのではないか、という仮説を抱くようになったのである。

（３）このことを強く後押ししたのは、本国ロシアでの研究の「覚醒」、あるいは「復活」である。1980 年代後半に開始したペレストロイカ期とそれに続く 1991 年のソ連邦崩壊後、それまである種タブーとなっていた貴族文化ならびにウサーヂバ研究が「復権」し、ソ連時代の文化（史）研究の成果も取り入れながら、続々と注目すべき新たな成果を生みつつあったことが本研究の大きな契機となったことは認めざるをえない。また、ウサーヂバ研究がソ連崩壊後のロシア人文学研究のひとつの集約点であることに本研究者は着目した。なぜならば本国ロシアでは、革命前の貴族文化を中心とした文化全体の多角的・複眼的見直しが幅広く進行していたからである。その状況下、ウサーヂバという文化現象が建築史学、歴史学、美術・庭園史研究、文学研究、思想史学等が深く相互に関連し、交差する学際的色彩を帯びていることが確認され、ウサーヂバ研究が独立したディシプリンとして認められつつある。

（４）こうした学問上の背景を見ながら。本プロジェクトは大きな意義を有するとの確信のもと遂行されてきたと言える。ちなみに、本プロジェクトに先立つ形で、本研究代表者はすでに、科学研究費助成事業に応募し準備を行ってきたこと（「ロシア貴族屋敷文化研究－その社会的文学性」挑戦的萌芽研究、2010－2012 年、「ロシア文学成立の文化史的研究―領地（ウサーヂバ）文化とメモアールを中心に」萌芽研究、2003－2005 年）を強調しておきたい。それら先行する科学研究費による調査研究の延長上に本研究は位置づけられる。

２．研究の目的

（１）研究対象となったロシア貴族屋敷（ウサーヂバ）文化は、たんに建物ならびに各種施設として、あるいは社会経済史的側面からのみ把握できるものではなく、そこに繰り広げられた生活・習俗の総体、自然観や世界観、そこで生み出された各種の表現・芸術作品をも含む文化総体をも視野に収めることで理解されるものである。貴族の領地・屋敷ならびに建物そのものは 1917 年のロシア革命後に消滅したとはいえ、それまで形成されたウサーヂバ文化は各種文化財・文化資源ならびに観念・記憶として残存し、現代にまで受け継がれてきたと考えられる。したがって、ウサーヂバ文化の構造と機能を明らかにすることで、現在のロシア人の生活観や自然観、時間・空間観を理解し、説明・記述できるものであり、その解明も本研究の大きな目的である。

（２）ウサーヂバ研究をどのような方向に定位するか、については、ウサーヂバという現象それ自体の多面性・多元性から見て、多くの議論が必要である。上記した多くの分野が緊密に関連するとはいえ、基本的スタンスを明らかにしておかねば明確な目的を設定しえない。本研究では、それをロシア近代文学・文化が成立していく上で基本的ファクターとしてのウサーヂバ文化をひとつの《ランドシャフト》として捉えることとした。そのことにより、近代ロシア文学の成立に大きな契機となったと考えてられるウサーヂバという文化現象の歴史と構造の全体像を描くことを目的としたのである。

（３）より具体的には、研究代表者ならびに分担者、協力者の関心領域を考慮して、地方のウサーヂバ領主の文化的・文学的活動、特にメモアールの意味、18－19 世紀初頭までのロシア文学の諸相、貴族個人が領地内に所有した蔵書文化、貴族の家族史と近代化、革命前からソビエト期を通して現代までのウサーヂバ観の変容、さらに都市郊外別宅文化への関心、といった具体的現象を手がかりとしてウサーヂバの文化的機能の多面性を明らかにする目的を持つ。

３．研究の方法
（１）本研究の３カ年の中で、ロシア・ウサーヂバに対するアプローチは、限られた時間の中での現地調査を現地ロシアの研究者の協力を得て行うことと、そして研究代表者ならびに分担者による文献調査という形で行われた。
（２）現地調査について言えば、具体的には、ペテルブルグ郊外のプリユーチノ（貴族オレーニンの所領）、マリイノ（貴族ストロガノフ家の所領）、ロジデエストヴェノ（作家ナボコフ家の所領）、ガッチナ近郊の「ダーチャ村」とその周辺、オネガ湖上の島ヴァアラム、また、アンドレイ・ボロトフの関連からトゥーラ地方のドヴォリャニノヴォとボゴロヂツクを調査した。モスクワ近郊ならびに中央ロシアが少なかったことは残念だったが、これは今後の課題である。調査方法について言えば、これは準備段階で周到な文献調査を行い、それら各地のウサーヂバの成立・歴史について理解をした上で、現地で現状を観察することとした。そこから明らかになったのは、所有者個人あるいは貴族の一家が著名なケースは周到に、あるいは土地の人々の尽力によって貴重な文化遺産として保存されている（オレーニン、ナボコフ、ボロトフ、ストロガノフ家）のと同時に、宗教施設、病院等々さまざまな施設へ転用されている事例があることである。また、多くの旧ウサーヂバが、保存のための資金・文化政策の「貧困」等の不足からほとんど廃墟となっているケースも多く見られた（商人エリセーエフの家他）。さらには、マリイノのように、ウサーヂバを見学用に復元して観光客を誘致し、各種文化行事に使用しているケースも見られた。このように、ウサーヂバの現状調査という方法は、単純だとはいえ、やはり本研究の問題設定を明確にする上で重要と考えられる。
（３）18－19 世紀初頭・前半のロシア文学者・文人が残した各種テクストをていねいに読み解いていくことが本研究の基礎的作業である。それを、通常の文学史の枠組みで構想しようとすれば、ウサーヂバをめぐるテクストはもれ落ちてしまうはずであり、作品の完成度や芸術性といういわば文学鑑賞の観点からしても、ウサーヂバ文化は視野に入ってこない。せめて作品背景とか、作家のバイオグラフィとの関りで触れられるだけである。その意味からも、本研究が目指そうとした方向性は、いわゆる文学（史）研究の枠内には収まらず、新しい問題提起を含むものである。その意味で、本研究の成果が未だ十分の示されたとは思えないが、新たな方法の模索の試みであることは間違いないと考えている。

４．研究成果
本研究の行われた３カ年の間の具体的成果は、以下にあげる雑誌論文、講演、編著に明らかであるが、特に強調すべきは、科研のプロジェクト名を表題とした成果報告書の刊行である。これは、全体で 176 ページ、「まえがき」「レジュメ」も含めて全１３本の成果を収録したものである。しかも、文学作品の翻訳２点、ロシア語論文３点、研究論文の日本語訳１点、文献目録１点を収めており、本国ロシアの研究者にとっても大きな影響と示唆を与える貴重な仕事であることを確信している。以下にその目次をあげる。

まえがき（坂内徳明）
・アンドレイ・ボロトフ『手記』研究補遺（坂内徳明）
・ニコライ・カラムジン『エヴゲニイとユリヤ』にみる「田舎の領地の物語」（金澤美知子）
・デルジャーヴィン「エヴゲーニーに。ズヴァンカの生活」日本語訳と注釈（鳥山裕介）
・19 世紀－20 世紀初頭ロシア帝国内のベラルーシにおけるウサーヂバ蔵書（Ｈ．Ｂ．ニコラエフ）
・ウサーヂバ蔵書の研究史構築に向けて（Ｏ．Ｈ．イリイナ）
・日常文化における個人蔵書の研究―問題設定に向けて（Ｏ．Ｈ．イリイナ　佐藤洋輔訳）
・ロシア貴族とウサージバ―A．H．オレーニンと別邸プリユーチノ（３）（坂内知子）
・ストロガノフ家の人々とウサーヂバ―《マリイノ》への道（１）（坂内知子）
・古い「ダーチャ」から新しい「ウサーヂバ」へ（Ｈ．Ｂ．ニコラエヴァ）
・[レジュメ]（坂内知子）
・ペテルブルグ都市文化史関連文献目録（A．M．コネチヌィ）
・革命前ペテルブルグ文化史研究の一スタンス―A．M．コネチヌィの仕事（坂内徳明）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）
①坂内徳明、アンドレイ・ボロトフ研究の現在―『ボロトフの手記、あるいは子孫のために自ら書いたアンドレイ・ボロトフの生涯と出来事』を中心に、人文・自然研究、査読無、第 9 号、2015、pp.116-164
②坂内徳明、A.F.マイエルベルクのロシア見聞録・スケッチ画帳について、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、No.35、2015、pp.38-71
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27328
③金澤美知子、ドストエフスキー『白痴』における 18 世紀の「甘美な憂鬱」、SLAVISTICA、査読有、30 号、2014、pp.55-66
④坂内徳明、ロシア荘園文化の発見‐ニコライ・ヴランゲリと彼の仕事、人文・自然研究、査読無、第 8 号、2014、pp.223-293
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/han

dle/10086/26534
⑤坂内徳明、ロシア風俗百景　J.A.Atkinson and J.Waker, A Picturesque representation of the Manners, Customs, and Amusements of the Russians (V. 1-3, London, 1803-04, 1812)について、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、No.34、2014、pp.1-24
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/26555
⑥金澤美知子、18 世紀ロシアの恋愛小説に見る「公」と「私」、日本 18 世紀ロシア研究会年報、査読無、第 10 号、2014、pp.14-18
⑦鳥山祐介、"Английский сад" как метафора в сочинениях Н.М. Карамзина. Russian Literature、査読有、75（1-4）、2014、pp.477-490
doi:10.1016/j.ruslit.2014.05.021
⑧鳥山祐介、イズマイロフ『南ロシアへの旅』に描かれたウクライナ：「風景」「歴史」「信仰」を巡る感傷旅行、中村唯史編『ロシアの南：近代ロシア文化におけるヴォルガ下流域、ウクライナ、クリミア、コーカサス表象の研究』、査読無、2014、pp.1-22
⑨坂内徳明、ロシア貴族屋敷（ウサーヂバ）のエンサイクロペディスト　アンドレイ・ボロトフのこと、言語文化、査読無、50 巻、2013、pp.31-63
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/26106
⑩坂内徳明、Один японец в Белоруссии в 1928 г. Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences、査読無、Vol.54-1、2013、pp.19-30
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/26118
⑪鳥山祐介、巣箱から飛立つ蜜蜂のように：クルイロフの寓話詩『鴉と鶏』と 1812 年のモスクワ、千葉大学比較文化研究、査読有、1 号、2013、pp.122-137
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00117261

〔学会発表〕（計 1 件）
①金澤美知子、ドストエフスキーの「手紙」とトルストイの「日記」、日本トルストイ協会第 20 回総会、2015 年 9 月 26 日、昭和女子大学（東京都、世田谷区）

〔図書〕（計 1 件）
①金澤美知子（編著）18 世紀ロシア文学の諸相、共著者：三浦清美、鳥山祐介、大塚えりな、安達大輔、豊川浩一、田中良英、矢沢英一、大野斉子、金沢友緒、長縄光男、乗松亨平、三好俊介、中上美砂、ナターリヤ・コチェトコーヴァ（共著）、『18 世紀ロシア文学の諸相』、水声社、401 頁、2016 年

６．研究組織
（１）研究代表者
坂内　徳明（BANNAI,Tokuaki）
一橋大学・名誉教授
研究者番号　00126369

（２）研究分担者
金澤　美知子（KANAZAWA,Michiko）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号　60143343

鳥山　祐介（TORIYAMA, Yusuke）
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号　40466694

（３）研究協力者
N.V.ニコラエフ（NIKOLAEV, Nikolai）
ロシア・ナショナル図書館・貴重書部門長

O.N.イリイナ（IR’INA, Ol’ga）
ロシア・ナショナル図書館・貴重書部門研究員

坂内　知子（BANNAI, Tomoko）
国際基督教大学・講師

N.V.ニコラエヴァ（NIKOLAEVA, Natal’ya）
ロシア文化研究者